

アジア選手権の舞台裏

村越 真

■アウェーでの戦い

18年前のアジア環太平洋選手権では総務を引き受け、昨年のスキーOの世界選手権でも、基本的には総務部門を受け持っていた。それだけの経験があるにも関わらず、総務に「アウェー」意識があったのは、基本的にこの分野が自分の性にあっていないからだろう。J O Aで会計の打ち合わせや締めをやるたびに感じる頭痛につくづくそう思う。その上、今回は主催者としての人事、会計からプログラムづくりまで、全てを自分に元に集中させてしまった。サポーターの全くないアウェーゲーム。そんな趣でアジア選手権への準備は始まった。

2009年のスキーOが終わり、準備が本格化した時、折良く行われた5月の打ち上げで、清水さんとチーム的場に運営を打診した。二人は拍子抜けするほどあっさり肯定的な返事をくれた。その後実行委員会の枠組みは夏までにはほぼ固まり、1年前に出すはずのブリテンも基本的には夏にはできていたが、輸送・宿泊の細部が詰め切らず、正式版の要項を出せないまま秋に突入してしまった。秋は9月から12月まで、自分が中心となる大きなイベントを4つ抱え、それらに追われて、正式版の要項の完成は1月にずれ込んだ。結果として要項をウェブにアップできたのは、1月中旬。申し込み第一号のイギリス人夫妻から、「要項はまだか？」と問われた直後だった。

時期はともかく、その内容はエントリー方法も十分詰めきれず、せっかくのエクセルによるエントリーシートも十分に生かせない形式での見切り発車であった。要項の不十分さは、あとあとまで影響する。アウェーの雰囲気飲まれた、開始早々のオウンゴールとも言える失点だった。

技術レベルは世界選手権に比べるべくもないが、総務の負荷は遙かに高い。選手の数は3倍だが、対応すべき単位は世界選手権が20ほどなのに対して、アジア選手権ではその10倍以上になる。参加パターンも一律ではないし、国際大会に不慣れた海外参加者にも対応しなければならない。要項の情報不足等で、様々な入金の不備や質問が発生する。3月に入ってから受付担当の清水さん、伊藤さんはその対応に追われた。修正が発生するとデータ処理をしているITにも波及する。払っても払っても降りかかる火の粉のような運営負荷の中で、総務・ITチームが

疲弊していくのが目に見えるかのようなだった。皆、メールでのやりとりの中で弱音を小出しにし、大会後のご褒美を約束しあいながら、かろうじてバランスを保った。

4月になって、様々なタイムリミットが迫ってきた。受付のリストを確定させ、プログラムを完成させ、宿舍関係の手配を終え、総務関係の人の動きを明確にすると同時に、学生ボランティアへの指示もしなければならなかった。その一方で、総務は参加者からの問い合わせや申し込み不備に追われていたので、ウェブに掲載すべきプログラムの完成も遅れた。

締め切りの早い仕事を片づけ、それが済んだら次に進むという、全くの自転車操業状態だった。2月中旬からストレスにさらされて、一端は切っていた精神安定剤を復活させた。そこまでは想定内だった。さらに4月中旬には夢にまで「もうこれ以上仕事できない！」という場面が表れた。フロイト恐るべし。

■岐阜ステージ

岐阜ステージは、牧ヶ野さんの活躍で、当日には心配することはほとんど無くなっていた。総務の僕にとっての心配事は宿舍であった。国立大学の研修施設を借りたものの、こうした施設になじみのない外国人参加者に、布団の畳み方から食堂や風呂の時間まで、細かい規則を守らせることが不可能なことは容易に想像がついた。その監督を静大と名大の女子学生2人に任せた。心細そうなWさんTさんを施設に残して運営宿に戻るのには、本当に気が引けた。

案の定、二日目に退所した宿泊者の部屋のあまりの乱雑ぶりに管理人さんがキレた。菓子折を持って謝りにいく。旧知のカザフスタンのボスのウラジミールには、「入所の時言われたように部屋をきれいにしてね。じゃないと、この子(女子学生)が困るんだからね」と釘を指し、出発時にもにらみを利かせにいった。後から、「ボスの部屋は、こんなにしなくてもいいのにというくらいシーツも元の折り目通りに畳んでありました」という報告があった。胸



▲内外の仲間がいるから乗り切れる。この歳になると気恥ずかしくなるような台詞だが、国際大会を終えるたびに実感する。的場氏と香港の仲間たちと、バンケットにて。

に手をあてて僕の小言を聞いていたウラジミールの生真面目な姿が思い出された。

二日目、中国のエース、リ・ジが、「差し上げたいものがあります」といってやってきた。くれた袋には北京焼鴨と書いてある。要するに北京ダックか。豪華そうな袋は見かけ倒しではなかった。僕自身忘れていた3年以上前に送った本への感謝の気持ちだそう。そのボーイッシュな見かけから想像できない心遣いに、またもギャップ萌え〜。



▲リ・ジのくれた北京ダックは本当にうまかった。

■成長

唯一「大人」でフリーになることのできた久保さんは、前半は旭高原少年自然の家、後半は野外教育センターに「飛ばされた」。旭高原は宿泊予約数のトラブルもあって、とんでもない状況になっていたから、商売で鍛えた久保さんでなければ務まらなかっただろう。案の定、布団の畳み方は、この手の施設としてはどうも容認できず、久保さんとお手伝いの名大の学生は、相当数の布団を畳み直した。久保さんは愛知

に移動した翌日、腰痛で寝込んでしまった。

そういえば、初日の朝、清水さんからいつになく気落ちした声で電話がかかってきた。第一便のバスに積み残しが出たのだ。某高校のオリエンテリング部が大量にバスを予約していたのだが、それをひとまとめにして記載していたので、合計数を出す時に本来40数名のところを1名とカウントしてしまっただけが響いていた。スキーOの世界選手権では、船橋さんをして評価の高かった切れ者の清水さんにして、この凡ミス。思わずギャップ萌え〜。

一方で、最初は中津川施設に残すのに不安を覚えた静大女子学生は、数日にして大きな成長を遂げていた。バス運行には最大限の気を遣っていたJTBの方からは、「農協のバス転回場所にはぜひWさんを」とご指名がかかる。多くの人に支えられて数々の国際大会の開催に携わって16年。楽しく充実感を感じる時ばかりではないが、そのプロセスでの大きな楽しみは人材の成長に出会うことにある。この16年間は熱意と能力を兼ね備えた人々との出会いの連続だった。

成長するのは若者だけではない。世界選手権の開催が決まった時、「冥土のみやげに運営してくださいよ!」と、失礼を言った石田夫妻は、厳しい世界選手権の日々を乗り切った後、毎年のようにマスターズや世界選手権に出かけ、運営者として出会った海外の人たちと交流するのが楽しみだという。次回の中国にも、その次のカザフにも行きたいという。そんな元気な石田夫妻を見るたびに僕はこう言う。「あと20年したらまた世界選手権が来ます。ぜひもう一つ冥土のみやげをつくってください」

若いとは言え、宿舎の世話で疲れの溜まったロングでは、Wはレース中、貧血で倒れたそうだが、それでも彼女はエリートに声をかけてはいけないと思って、横たわっていた。「でも、エリートの人はずいぶん、Are you OK?って聞いてくれるんですね。結局、エリートの田濃さん(先輩)に助けってもらっちゃいました。』

■評価と意義

どうせ10年以内には次の大会が来るのだから、世界選手権の時のような感慨は沸いてこなかったが、とにかく最終日のリレーの日を迎えた。この日、一般クラスではナンバービブの使い間違いによるいくつかの失格が出てしまった。エリートの香港チームも危うく同類の間違いで失格になるところだった。参加者の責任だとは言え、複雑な

エントリーシステムが影響していることも確かだ。一方で、エントリーを簡単にすれば、制約も増える。このあたりは難しいところだし、運営者とともに参加者も成長していなければならぬ。

心配された若年層のコースでも、レースは順調に進行した。結局リスタートにひっかかったのは、中国の3チームだった。日本語や英語でのアナウンスでもリスタートに表れる気配がない。業を煮やして、近くにいたリ・ジにお願いした。僕らには「本当に五輪アスリート?」と思うくらい丁寧にしゃべるリ・ジだが、すごい剣幕で「あんたたち、主催者に迷惑かけちゃだめじゃないの、時間なんだから早くきなさい!」(つてなことを言っていたのだと思う)としゃべって、周りにいたスタッフ一同唖然。代表紹介のときで出てきてきたJWOC代表を叱りとばした小野清子前会長のことを思い出した。

夕方には新城でバンケットが行われた。IOFを代表して、アジア地区会議議長のCKが、「日本にはアジア選手権が今後とるべきスタンダードを示してもらった」という評価を受けた。競技の寺島の中でもスタンダードを示しつつできるだけ簡素化するという気持ちはあったし、総務の僕もできるだけ場当たりのやるという考えはあった。だから、「アジアのスタンダードの提示」というのは、僕らにしてみれば「ハートを感じてくれた」思いだった。

世界選手権の時には、(IOFの理事でもあったので)地図委員会の公式見解を無視してまで、エリートにインクジェットプリンターの地図を使うのをはばかったが、今回は無視してもやろうと決めていた。地図委員長の前・トベイトは、「オフセットに関わる費用などわずかだし、一度印刷すれば何度も使える」と主張するが、モンスーン地域で競技人口の少ないエリアのことを考えていない。世界でより多くの国でオリエンテリングが実施されるためにも、インクジェット印刷の必要性についてさらに訴える必要がある。

■戦いを終えて

はじめてWCを成功させた時に気分を聞かれて、「戦には圧勝したが、兵をたくさん失った将軍の気分だ」と答えて以来、大会後の気分を戦の指導者にたとえる習慣がついてしまった。大会前の4月中旬、気分はほとんど「ベトナム戦争末期のアメリカ軍司令官」の気分だった。泥沼のような戦況で、「兵と国力を無駄に失っている」のではないかという気分が苛まれた。大会が終

わった時、せめて「北ベトナムの司令官」くらいにはなれたかなと思った。戦いに勝ったとは言いがたかったし、国土は荒廃したかもしれない。しかし、国のプライドを示し、それを周囲に認めてもらうことはできた。

大会が終わると、国土復興(会計整理)が待っていた。向いている仕事とは思えなかったが、スポーツ振興基金の助成ももらってしまった以上、きっちりした決算書を出す必要があった。いつもながら船橋さんを巻き込み、伊藤なおさんには事務を全面的に依頼し、なんとか30日以内の決算にこぎ着けた。

幸いなことに参加者も当初の予想を上回り、その分出費も増えたが、主管者への追加配分も多少なりともできる見込みがでた。財務のことでは気の合わないことの多い船橋さんだが、決算額を確定し、追加配分も含めて最終的な調整の提案を一発で飲んでくれたのは感動の一瞬だった。

報告書の協賛・後援への配布やIOF提出用の英訳も済んでいないが、残務整理のほとんどは終了した。アウェーでの戦いも同点に追いつき、さらに最小差のリードのまま、3分の延長戦を残すのみとなった(ドーハの例もあるから、気は許せない)。

(村越 真)



▲中津川施設の秩序を支えた名大のTさんと静大のWさん



▲惚れ直してしまった中国のリ・ジは、ロングでは圧勝。